子どもたちが帰ってくる福知山へ

～愛着形成の地域づくりを考える～

福知山市　月岡　龍平

はじめに

我が国は、昨今、本格的な「人口減少時代」を迎え、出生数より死亡数が上回る人口の「自然減」と、都市部への人口流出という人口の「社会減」の課題を併せ持っている。特に地方部においては、大都市圏への「人口移動」と相まって、加速度的に人口減少が進行するといわれている。これまでからも、昭和 29 年から平成 21 年までに日本全国で 1,147 万人もの若年層が地方部から大都市圏へ流出している。経済活動の担い手である「生産年齢人口」の減少は、経済活動力の低下のみならず、高齢者等に対する社会保障費の増加による国・地方公共団体の財政状況の悪化など、多方面に影響を与える。

当市でも、高等学校を卒業後、大多数の青年が都市部へ流出する。それは、進学であったり、都会への憧れであったり理由は多様であるが、若年層世代が都市部へ行った後も当市に対して誇りを持ち、帰ってきてくれる町になってほしいと、筆者は思う。

そのためには、今いる子どもたちに対して、住んでいる地域に誇りを持てるような地域づくりを進めていくことが大切である。そこで本稿では、「生産年齢人口」に到達するまでの「年少人口（0 歳～14 歳）」の子どもたちをターゲットにした愛着形成の地域づくりを考えたい。

１　福知山市の概要

当市は京都府北西部に位置し、中心部には都市機能や産業が集まり、郊外部は自然豊かな風景が広がっている。また、京都市及び神戸市には直線で60km､大阪市には､直線で70kmの距離にあり、鉄道ではＪＲ山陰本線・福知山線及び京都丹後鉄道宮福線の結節地となっており、古くから大都市圏と日本海側を結ぶ交通の要衝として栄えてきた。

また、豊かな自然、歴史・文化、充実した教育・医療機関など誇るべき豊富な資源を持っており、第 5 次福知山市総合計画「未来創造福知山」では、当市は北近畿地方の交流拠点として位置づけられている。

■図１　福知山市の位置

（1）福知山市の人口推移

当市の人口は、表 1 のように平成 12 年（2000 年）の 83,120 人をピークに人口減少に転じ、平成 27 年（2015 年）国勢調査では、78,935 人となっている（令和元年 12 月末現在 77,682 人）。今後もさらに人口減少は続き、平成 30 年に発表された国立社会保障・人口問題研究所の推計によると令和 22 年（2040 年）には 69,098 人になるとされている。

	総人口（人）	年齢3区分人口			
		年少人口（人）	生産年齢人口（人）	老年人口（人）	年齢不詳（人）
1980 年	81,398	17,544	52,504	11,326	24
1985 年	83,057	17,218	53,537	12,298	4
1990 年	82,791	15,333	53,352	13,992	114
1995 年	82,555	14,004	51,843	16,708	0
2000 年	83,120	13,018	51,316	18,713	73
2005 年	81,977	12,060	49,248	19,666	1,003
2010 年	79,652	11,283	47,112	20,912	345
2015 年	78,935	10,917	44,673	22,787	558
2020 年	77,420	10,487	43,710	23,223	
2025 年	75,610	10,017	42,515	23,078	
2030 年	73,707	9,451	41,452	22,804	
2035 年	71,521	8,956	39,909	22,656	
2040 年	69,098	8,638	37,133	23,327	

■表１　福知山市の人口動態

人口の減少傾向としては、平成 17 年以降、出生数より死亡数が上回る「自然減」の傾向が続いている。なお、当市の合計特殊出生率は平成 19 年まで減少傾向にあったが、平成 20 年～平成 24 年の間で増加に転じ、1.96 となっている。京都府平均の 1.24、全国平均の 1.42 と比較すると非常に高い数値になっている。しかし、人口維持の置換水準である 2.07 には届いていないこと及び女性人口が減少しているため、今後も人口の「自然減」は続くと見込まれる。

また、平成 12 年以降、ほぼ一貫して転出が転入を上回る「社会減」の傾向も続いている。これは、北近畿圏内から就職層等の男性の転入が多いものの、東京圏及び京阪神地方への大学進学や、子育て世代を中心としたファミリー層の転出等が多いことが原因であると考えられる。

（2）年少人口の推移

本稿のテーマである「年少人口」においては、「福知山市人口ビジョン」の統計では、表 1 のように昭和 55 年（1980 年）から一貫して減少傾向にあり、令和 22 年（2040 年）には 8,638 人となると予測されている。総人口に占める年少人口の割合も昭和 55 年の 21.55%から令和 22 年には 12.50%まで減少すると見込まれている。

2　福知山市内の学校教育の現状

（1）義務教育から高等学校教育まで

福知山市内のほとんどの公立小学校は、元々は旧村単位において設置され、平成 21 年から平成 30 年にかけて、児童数が 4,736 人から 4,243 人に大幅に減少し、統廃合が進み、平成 30 年度には 21 校（令和元年現在は 20 校）となっている（表 2）。さらに、小学校の児童総数についても、少子化に伴い今後はさらに減少していくことが推測され、令和 2 年度に遷喬小学校と佐賀小学校、修斉小学校と天津小学校、上川口小学

年次	学校数	学級数	児童数（人）		
			総数	男	女
平成21	27	247	4,736	2,438	2,298
平成22	27	240	4,627	2,374	2,253
平成23	27	242	4,611	2,389	2,222
平成24	27	245	4,558	2,349	2,209
平成25	25	233	4,512	2,320	2,192
平成26	25	235	4,402	2,245	2,157
平成27	23	226	4,319	2,187	2,132
平成28	23	227	4,345	2,197	2,148
平成29	23	225	4,290	2,178	2,112
平成30	21	212	4,243	2,136	2,107

■表２　市内小学校児童数の推移

校と金谷小学校、令和 3 年度に大江地域 3 小学校の統合によりさらに減少し、複式学級を採用している小学校は無くなる見込みである。なお、統廃合により遠方の小学校に通わざるを得なくなった児童のためにスクールバスも導入されている。また、中学校では、福知山高等学校附属中学校や京都共栄学園中学校といった市立以外の中学校に進学する生徒が一部いるが、多くは市内の公立小学校の児童がそのまま市立中学校の 9 校に進学する。そのため、小学校の児童数の減少に伴い、中学校の生徒数も同様に減少していくことが考えられる。

高等学校は、市内に公立高等学校 3 校及び分校 1 校、私立高等学校 3 校がある。福知山市外の京都府中丹圏内の公立高等学校（綾部・西舞鶴・東舞鶴）に進学する生徒もいるが、いずれも福知山市内の自宅から通学可能範囲である。一方、北近畿圏及び兵庫県丹波地方、京阪神地方からスポーツ推薦等で市内の私立高等学校に進学し、市内で寮生活を行う生徒も多数いる。このため、全体として高等学校入学時の市内在住の生徒数は、中学卒業時よりも増加傾向にある。

（2）大学教育

当市では平成12年より私立大学の京都創成大学（後に成美大学に改名）が開学したが一度も定員を満たすことがなかった。その後、成美大学の存続危機から当市において大学の公立化の議論が行われ、平成 28 年度より、前身の成美大学を引き継ぐ形で、福知山公立大学が開学した。

福知山公立大学は現在「地域経営学部」のみであるが、令和 2 年度からは「情報学部」が設置されることが決まり、より多様性のある大学となる。地元商店街の活性化、農山村地域へのフィールドワークなどを通して地域に根ざした大学になっている。

出身地	1年（人）	2年（人）	3年（人）	4年（人）	合計（人）
福知山市	2	1	4	4	11
京都府（福知山市を除く）	11	9	8	10	38
兵庫県	16	15	14	9	54
福井県	10	12	8	3	33
愛知県	6	3	14	3	26
石川県	6	11	8	1	26
静岡県	7	4	8	1	20
富山県	10	4	8	0	22
岡山県	3	8	3	4	18
その他	61	49	76	33	219
海外	0	0	0	2	2
総数	132	116	151	70	469

（注）出身地は出身高等学校所在地で算出。

■表３　福知山公立大学の生徒数

北近畿地方唯一の四年制大学である福知山公立大学は、地元の高等学校卒業生にとって進路選択の一つになっているが、福知山市内の高等学校からの進学者は、令和元年現在で 11 人であり、これは全体の 2%程度である。

また、令和元年度の卒業生が、福知山公立大学に移行してからの第一期目の卒業生となる。各地から福知山公立大学に進学した学生がどの程度、今後も当市に残っていくかも注目すべき点である。

３　市の総合戦略の方向性

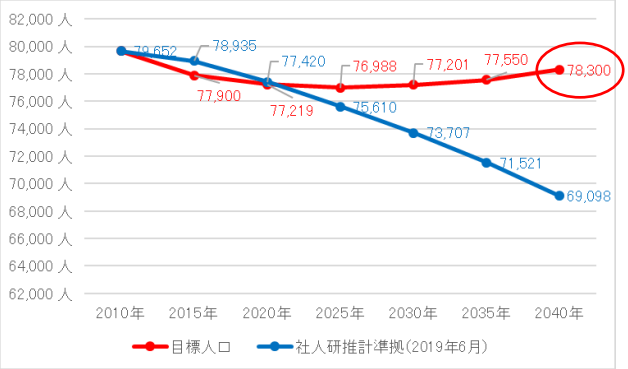
我が国そのものが人口減少社会に突入している状況を鑑みると、一定程度の人口減少は致し方ないと考える。しかし、当市では平成 27 年度に「福知山市人口ビジョン」を策定し、

目標推計人口を 2040 年に 78,300 人にすると定めている（図 2）。それを受けて、「福知山市まち・ひと・しごと・あんしん創生総合戦略」（以下、総合戦略）において、人口減少問題等を克服し、地方創生を成し遂げるため、人口、経済、地域社会の課題に対して一体的に取り組むこととしている。

総合戦略では以下の 4 つの基本目標を定めている。

Ⅰ　福知山市にしごとをつくり、安心して働けるようにする
Ⅱ　福知山市への新しいひとの流れをつくる
Ⅲ　若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる
Ⅳ　時代に合った地域をつくり、安心なくらしを守るとともに、地域と地域を連携する

総合戦略は、これら 4 つの基本目標を実現できるよう、様々な政策による効果を集約し、人口減少問題を克服することを目的としている。今後も人口の安定化を図り、当市全体の活力の向上を進めていくために、総合戦略に沿って様々な施策の数値目標を検証していく必要がある。



■図２　本市の人口目標と社人研の推移

また、総合戦略と同じ時期に第 5 次福知山市総合計画「未来創造福知山」を策定した際に、市内在住の高校生を対象に将来的な定住思考に関わるアンケートを行った。その結果、図 3 のように「住みたいと思う」、「いずれ住みたいと思う」を合わせても 32%程度であった。高校生の定住思考が低い理由としては、都会へのあこがれ、交通の不便さ、まちのにぎわい、雇用の場の不足などが理由と分析されている。

■図３　高校生の将来的な定住思考

これらのデータを受けて、当市の総合戦略では、先述の福知山公立大学の設置、北京都ジョブパークと連携した就業支援セミナーや就職個別相談の開催などによる就業支援といった施策を実施して、高校生の定住促進、U・I ターンの支援を行っている。

当市でも生じている年少人口の絶対数の低下は、その後の若年層世代の減少、子育て世代の減少、さらに子どもが少なくなり人口の減少が続くという負のスパイラルを生み出す。人口減少の負のスパイラルに入ってしまうと、人口減少には歯止めがかからなくなってしまう。

一方で、年少人口世代が高校生になり、進学・就職等の「18 歳の選択」後に、当市に留まる、あるいは都市部の大学等に進学をしてもUターンするようになれば、目標人口に近づけられるのではないかと考察する。安定した人口の維持に向けては、総合計画が対象と

する高校生だけでなく、小・中学生など低年齢からの地域への愛着形成が必要ではないだろうか。

４　地域への愛着形成機会の現状

（１）学校における地域学習

当市では、地域愛を育むために、各学校で特色ある地域学習の取組を行っている。例えば、「福知山踊り」は、毎年 4 月のお城まつり、8 月の福知山ドッコイセまつりといった市民総出で行われる地域に根ざした踊りだが、昭和小学校の 3 年生は、「踊りせんべい」の販売店において、「福知山踊り」の焼き印を押す体験を授業で行っている。

他にも、大江町の美河小学校では、総合的な学習の時間で、「大江の鬼」にまつわる伝説や特産物などを学んでいる。さらに、美河小学校を含む大江町内の 3 小学校においては、卒業証書を地元で古くから伝わる「丹後二俣紙」で制作している。また、小中一貫校として平成 31 年 4 月から開学した三和学園においては、地域での体験学習を通じて、自立した子どもを育てる「三和創造学習」を行っており、各学年のカリキュラムに併せて地域を歩いたり、歴史を勉強したりしている。

（２）教育部局における地域愛形成事業

「こだま掲示教育」として、市内の街角黒板 349 箇所で掲示を行っている。「こだま掲示板」は、こだま教育推進委員が各地域の通学路・公共施設等に板書を行っており、青少年向けに 6 行のメッセージが書かれ、さりげなく、押し付けがましくなく、心に響くような内容が書かれている。特に小学生の登校班の集合場所に掲示されていることが多いため、「地域でいつも見守っている」という大人たちのメッセージが込められている。

■写真１　こだま掲示板

（３）地域における子ども会の活動

子ども会は、自治会単位あるいは小学校区単位で組織され、小学生から中学生までの幅広い年代層で構成されている。子どもにとって、身近な地域社会における仲間集団の形成と活動の展開は、社会生活の基本を学ぶということでもあり、人間関係が弱くなっている現代社会においては、非常に貴重な機会である。

現在は、市内の市街地区域では、ほとんどの小学生が加入しているが、中学生になると加入率が格段に下がる。これは中学生になると学校の部活動や習い事等で忙しくなるためと考えられる。子ども会の活動実績も保護者への負担増から減少傾向にある。

また、昨今の地縁意識の低下、隣近所との関わり合いの変化から、子ども会のある自治会に住んでいても、子ども会に加入していない家庭もある。さらに、少子化に伴い、子ど

も会を組織することができなくなった自治会が多数あるほか、市の「子ども会連絡協議会」に加盟できていない地域もある。

行政では、各地域で行う子ども会の行事を対象に、キャンプ用品や各種模擬店用品等の貸し出しを行っている。また、成人指導者研修会を開催し、指導者の意識等の醸成を行っており、子ども会組織の充実と活動の促進を図っている。

そこで、筆者が居住する福知山市南岡町自治会の子ども会活動状況について、役員であるＳ氏にヒアリングを行った。

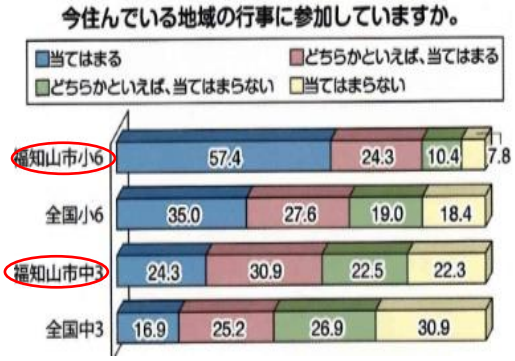
【南岡町自治会Ｓ氏からの話】
・現在、人数は小学生 18 人、中学生 9 人が加入しているが、全ての子どもたちが加入しているわけではない。
・活動内容としては、小学校新一年生歓迎会、火の用心巡回（夜回り）、地蔵盆、クリスマス会、お別れ会などを行っている。他にも他自治会との交流行事で 9 月には球技大会、10 月には秋祭りで神輿の巡行を行っている。
・子どもの人数は昔と比べ減少しているが、いつまでも子どもたちの交流の場であってほしい。横の繋がりだけでなく、縦の繋がりがあるため、貴重な体験ができる。
・南岡町自治会では一人に役が集中しないように、役は 6 年間で最大 2 回までとしている。
・昔と比べてよその子にはなかなか話しかけづらくなってきており、お楽しみ会等でふざけている子がいても注意しづらい。

上記の内容のヒアリングを行ったが、特に筆者が気になったのは、火の用心巡回（夜回り）活動である。火の用心巡回は毎年夏頃に実施しており、拍子木を鳴らしながら、子ども会で南岡町地区内を巡回している。30 年ほど前は月に 2 回程度実施していたが、現在は、児童数の減少、学校外時間の過ごし方の多様化により、巡回件数は年に 2 回程度である。

また、子ども会は保護者など周りの大人の支えが本当に大切であると感じた。そして、子どもたちのコミュニティの一つとして、いつまでも交流の場であってほしいという願いを感じ取ることができた。

（4）子どもたちの地域行事への参加意識

図 4 は、平成 29 年 4 月に行われた全国学力・学習状況調査結果において、「今住んでいる地域の行事に参加していますか」という質問への小中学生の回答を示している。当市では、「当てはまる」及び「どちらかといえば、当てはまる」の合計が、小学 6 年生が 81.7%、中学 3 年生は 55.2%でいずれも全国平均より高い傾向にあり、地域活動への参加意識が一定程度高いのではないかと考察される。以上の結果から、



■図４　今住んでいる地域の行事の参加率

地域活動への参加が一定程度、自分の住んでいる地域愛の醸成につながっているのではないか。また、「こだま掲示教育」のように社会全体で子どもを育てることができるのが当市の大きな強みと考えられる。

しかし、小中学生の地域行事への参加率は高い一方で、それが将来的な定住には繋がっていない現状がある。そこで、年少人口世代（0 歳から 14 歳）に着目し、同年代の仲間との交流を通して、さらなる地域への愛着形成や誇りの醸成に結びつくような取組事例を考察したい。

５　他地域に見る子どもたちの地域活動の事例

（１）何にもしない合宿（静岡県裾野市）

静岡県裾野市では、「何にもしない合宿」（以下、「合宿」という。）が実施されている。これは、裾野市東地区で、当初は PTA の内部サークルとして立ち上がった「裾野市東地区おやじの会」が、子どもたちと地域の「信頼関係」や「日常の関係」を築くことを目的に平成 24 年 9 月にスタートさせたものである。

月に一度、小学校の体育館でお泊り会を実施している。「ケンカをしないこと」、「使ったものの後片付けをすること」等といった最低限のルールを定めた以外は特にルールを決めておらず、「子どもたちのつながり」から関係をつくることを目的としている。子どもたちは各々でカードゲームやドッジボールなどの遊びを行う。また、大人たちも何にもしない参加者となっている。合宿は特別な企画や準備をせずに、誰にも負担をかけない形で行われ、令和元年 12 月までに 71 回実施されてきた。

合宿の実行委員長を務める小田圭介氏は、子どもたち自身の「やりたい」という気持ちや思いを地域のサポートを受けながら実施する経験は、信頼関係の構築や地域への愛着形成に繋がると話されている。そして、合宿を通じて様々な地域活動へのプラットフォームが形成できればよいとも語られていた。

（２）まちあるき（岩手県金ケ崎町）

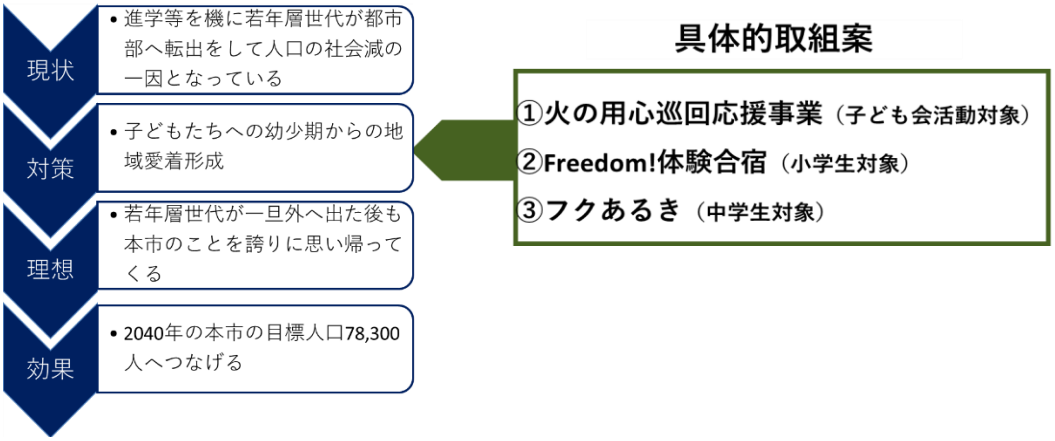
岩手県金ケ崎町では、平成 29 年度に金ケ崎中学校から、地域のことを知る授業あるいは郷土愛を育む授業に見直しができないかと教育部局に相談があり、それを契機に従来総合的な学習で行っていた「中学生議会」を改め、「まちあるき」学習を行っている。これは、子どもたちが自分たちの住む地域を目で見て、未来を考え、地域に誇りを持つことを目的にしている。

「まちあるき」は金ケ崎町の小学校区単位で実施し、地域の人と歩いて地域を巡回する。令和元年度は約 150 人の中学生を 6 地区 20 班に分けて実施された。「まちあるき」の実施に際しては、地区センターの所長や地域づくり支援員が地域の方の中から地域の案内人を見つけたり、コースを設定したり、中学生の質問を引き出したりした。今年度の「まちあるき」では、各地で過去にあった災害を地域の方から聞いたり、防災クロスロードというゲームを行ったりした。他にも、地区の神楽の復活や、農家が今後どうなるのか、町の駅を将来はこのように変えていきたい、といった議論が行われた。

金ケ崎町も子どもたちに対する郷土愛の醸成に力を入れて取り組んでおり、「まちあるき」に対して地域の人々も協力的である。町の担当者は、「まちあるき」を通して子どもたちが地域に愛着を持つことはもちろんであるが、子どもがどのように考えているかを大人が知ることが重要であると話をされている。また、郷土愛の醸成についても一定の効果があったのではと考察されている。

６　福知山市における新たな取組の提案

当市では、先述のとおり進学等を機に若年層世代の都市部への流出が人口の社会減の要因の一つとなっている。そこで、年少人口世代の子どもたちへの地域愛形成に向けた新たな取組を 3 点提案する。これらの取組により、地域と関わりを持ち続けたい若者が育ち、結果として、若年層世代が一旦都市部へ流出した後も当市に戻り、さらには当市の人口維持につながることが望ましい。



■図５　新たな取組の提案のイメージ

（１）火の用心巡回応援事業（子ども会を対象にした活動）

子ども会を組織する地域に限定されるが、地域内の火の用心巡回活動を行う。これは、地域の防犯・防火活動に繋げていくだけでなく、実際に地域を歩くことで、子どもたちにその地域の隠された魅力に気付いてほしいということも狙いの一つである。引率する大人の負担もあるので、負担にならないように各自持ち回りで当番を決め、大人自身も火の用心巡回に参加し、子どもたちの日常の考えや地域への思いをくみ取ってもらいたい。また、保護者の引率が困難であったり、昼間や休日に巡回したりする場合は子どもたちのみで巡回を行い、その際には地域の方が玄関先に立ち、声かけをしてもらってもよい。こういった巡回を通して、子どもたちは地域の方たちから見守られていると感じてもらえればと思う。さらに、地元の消防団とも連携した定期的な巡回も手法の一つであると考える。

火の用心巡回活動は、実は筆者自身も少年期に出身地の京丹後市久美浜町の口三谷地区で週に 1 回行っていた。その際には、同年代の子どもたちと一緒に巡回をすることで、非常に楽しく巡回ができ、今思えば地域への愛着形成につながったのではないかと思う。そのような体験等を通して、今でも故郷の口三谷地区のことを誇りに思っている。

こういった機会を作り出すのは、地域の大人たちの理解と協力が重要になってくる。ま

た、活動には様々な支援が必要であり、身体に身につけるカイロ、反射材等の配布を行政や市防火協会行うのはどうだろうか。他にも、現在当市では消防団の団員が、「福知山市消防団応援の店」においてカードを提示すると飲食物の割引やポイントの優遇などの一定のサービスの提供を受ける制度があり、これを火の用心巡回活動をする子どもたちにも適用できるかもしれない。

（２）Freedom!体験合宿（小学生を対象にした活動）

静岡県裾野市で実施されている「合宿」がモデルケースとなるが、同様に地域の公民館や廃校になった小学校等を利用して、「Freedom（自由）」を体験するお泊り会を実施する。子どもたちは、最低限のマナーさえ守れば、基本的には何をしてもよい。その中で、「遊び」を通して同級生だけではなく、異学年の生徒とも交流する。そこで子どもたちは、集団の中で自分のやりたいことを自発的に提案し、実行する力を養うことも目的の一つである。

裾野市の「合宿」では、大人は何かあった時に対応する人と施設の施錠を行う人の 2 人いればよいと考えられている。それは、子どもと一緒に寝泊まりをする大人を、スタッフではなく参加者と位置付けているからだ。こうして最低限の人数で、無理を強要せずに、継続して実施できる形式をとっている。

また、裾野市では「裾野市東地区おやじの会」のような任意のボランティア団体が実施主体である。当市でも、まずは地域単位でこのようなボランティア団体を立ち上げ、メンバー募集を行う必要がある。催し物の広報としては、各小学校への学級だより等により行う。そして、近隣の住民に理解をいただけるよう、新聞掲載等を通じて市民にも事業の周知を実施する。廃校になった小学校で実施をする場合は、年に一度程度地域住民と一緒に掃除をしてから、キャンプ等で使用する銀マットや毛布を用意した上で、夏場に実施するのが良いだろう。

（３）フクあるき（中学生を対象にした活動）

先のデータが示したように、高校生を対象にした将来的な定住思考が 32%程度しかないことから、中学生段階の地域愛着形成が特に重要なものになるため、最後に「フクあるき」を提案したい。

「フクあるき」の内容としては、既に三和学園において実施している「三和創造学習」とも類似した取組になるが、岩手県金ケ崎町でも実施している「まちあるき」と同様に中学生には実際に福知山市内の地域を歩いてもらい、そこで気付いたことを語らいながら、未来を考える契機にできればと考える。そして、「歩く」ことを通じて普段何気なく過ごしている地域の現状を感じ取ることができればと思う。

「フクあるき」の実施方法としては、総合的な学習の時間など、学校の授業でできれば望ましいが、カリキュラム上の問題で難しければ、公民館行事等で休日を利用して参加者を募って実施をする。

また、引率者としては地域をよく知る方だけではなく、「地域協働型実践教育」により福知山市内の様々な地域でフィールドワークを行っている福知山公立大学地域経営学部の学

生とも協働で実施できれば、なお良いものになるであろう。そして、引率者へは、ファシリテーター研修など、話し合いを重視した研修が必要になるだろう。

「フクあるき」を実践していく上では、地域の理解・協力してくれる大人の力が必要不可欠であると考える。そのためには、金ケ崎町同様に、強力な地域リーダーの育成及び学区ごとの支援員の設置が必要になってくるのではないか。

おわりに

筆者自身の少年時代を振り返ると、地域を「歩く」、仲間と「遊ぶ」ことを通じて、地域の良さや仲間と過ごすことの大切さを学ぶことができた。今後子どもたちは、様々な体験を通して地域の良さに気付いてもらい、地域愛を身につけていただきたい。

一般財団法人地域活性化センター椎川理事長も講演会で話されていたが、子どもたちが青年になり、就職や進学を機に一旦都市部へ出ることは仕方のないことであるが、その後様々な経験をして、人間的にも大きくなって、再び福知山市に帰ってきてもらえればと願う。そのためには我々大人が、子どもたちが帰りたくなるようなまちづくり・地域づくりをしていくことが重要である。そして、今いる地域の子どもたちを「社会の宝」として、大切に支えていきたいと思う。筆者自身も、童心に戻ったつもりで地域行事に参加し、子どもたちと一緒に楽しめたらと思う。そして、子どもたちが地域愛を醸成し、将来的に定住してもらえるような福知山市となるよう、行政職員として微力ながら尽力していきたい。

【参考文献・引用ホームページ】

・『地方消滅　東京一極集中が招く人口急減』中央公論新社　増田寛也編（2014）
・福知山市統計書（2009～2018）
・福知山市まち・ひと・しごと・あんしん創生総合戦略（2015）
・未来創造　福知山（2015）
・福知山市人口ビジョン（2015）
・福知山市学校教育の重点（2018）
・『地域づくり団体による子育て支援　地域づくり 12 月号』一般財団法人地域活性化センター（2019）
・『「生涯教育の町」宣言 40 周年記念大会記録集』金ケ崎町（2019）
・『平成 27 年版厚生労働白書』厚生労働省（2015）
・国立社会保障・人口問題研究所ホームページ
http://www.ipss.go.jp/pp-shicyoson/j/shicyoson18/2gaiyo_hyo/gaiyo.asp
・福知山公立大学ホームページ
https://www.fukuchiyama.ac.jp/faculty/faculty01/